

住民主体であり、かつ持続可能でなくてはならず、
そして、誰一人取り残してはいけない。

中村安秀先生

ライター神保康子

こんばんは。ゆきさんの研究室でのゼミにご一緒させていただきました、神保です。

長時間にわたるお話、本当にありがとうございました。

お話の中で最も印象的だったのは、インドネシアで中村先生らが作られた「母子手帳」を他の県でもどんどん真似しようという動きが出てきた際、「どうぞどうぞ」とコピーOKにされた点です。

その方がインドネシアの人々が「自分たちが作ったんだ」「自分たちの母子手帳だ」と思えて、早く広まっていくという“名を捨てて実を取る”ような、まさにボランティアの法則そのものだと、感銘を受けました。

いちいち許可制にしていたら、それこそ中村先生も大変だったという側面もあったかもしれません。それに「いいことなんだから広めたい！」という思いを止めることはできなかったでしょう。

とはいえ最終的には、今のインドネシアの母子手帳の表紙の裏側に、日本の国際協力の成果として最初に作られたことが明記されているのを見て、ほんわかした気持ちになりました。

また、今の母子手帳も、紙でもデジタルでもどっちでもいいという考え方にも、共感します。何事も、本来の目的を忘れずに、手段が目的になってしまわないことの大事さをここから学ばせていただきました。

余談ですが、実は、インドネシアの周辺のことを調べていた時に、「この島に母子手帳を広めたのは私たち」という人に実際にお会いしました。JICAでインドネシアに行かれていた日本の方なので、それは本当なのかもしれません。

インドネシアに取材に行った際、知り合いの知り合いの、そのまた知り合いで、しかもその方々も一度も会ったことのないFacebook上の友達、くらいの方が本当に良くしてくださいました。

中村先生は、任務を終えて日本に帰国される際に、随分と後ろ髪引かれたのではないのでしょうか。しかし、「ここで開業したら？」というお声もあった時、

地元の人たちでできないものをしてはいけないと帰ってこられたところ、ここでもまた、先生の本来の目的がずっと目の前に現れた気がしました。

グローバルヘルス、SDGs といったお題目は本当によく耳にしますが、これほど血の通った言葉として聞こえたことは、今までなかったかもしれません。医療は文化で、プライマリヘルスケアは住民主体であり、かつ持続可能でなくてはならず、そして、誰一人取り残してはいけない。その実践をされてきた先生の言葉だから、ずしんと胸に響きました。

美馬先生の質問に対して、中村先生は、成りゆきでこうなったのであり、自分でもまさかインドネシアに行ってプライマリヘルスの仕事をするとは思わなかったとおっしゃっていました。それでもなお「プラネタリーヘルス」的な素地がいつどこで中村先生の中にできてきたのか、もう少しお話を伺いたいなと思っています。

機会がありましたらぜひ、よろしく願いいたします。